

ミューズは微笑むか？

中間言語体系の再構築と英語詩読解の関係を探る

西原貴之（県立広島大学）

キーワード：英語詩，言語習得，再構築

1. 本発表の目的

第2言語習得論の発達と文学理論の進展によって、英語詩読解と英語学習の関連性については以前よりも理論的に議論することが可能となってきた。特にここ10年の研究では、英語詩読解は学習者の言語形式への気づきを促すという点が指摘されてきており、このことは実証的にも確認されてきた。しかしながら、英語詩読解は学習者に自らの中間言語体系に疑いの目を向けさせる傾向があることも観察されており、このことはほとんど議論されていない。本発表は、言語形式への気づきという観点に加えて、中間言語体系の再構築という観点からも英語詩の英語教育における役割について議論することの必要性を示す。

2. 英語文学教材と英語の言語知識発達に関する主張

英語教育における文学教材の意義として、英語学習動機を高める、英語圏の文化的知識の獲得を促す、人間的な成長を促す、など様々な主張がなされてきた。そのような主張の1つに英語文学教材は英語の言語知識発達に有益に寄与するという主張がある。この主張は更に大きく4つの主張に下位区分することが可能である。それらは、(1) オーセンティックな英語であるという主張、(2) 名文であるという主張、(3) 日常会話で使われる実用的な英語表現が多く含まれているという主張、(4) 英語の言語形式への気づきを促すという主張、である。最初の3つの主張は、英語文学教材の言語的質に注目した議論であり、英語文学教材の暗記は有用である、言い換えると、英語文学教材は英語教育のモデル文として機能するという主張である。これら3つの主張に対しては、英語文学教材内の語彙の難しさや逸脱的な文の存在という観点から、反論がなされてきた。一方、4つ目の主張は英語文学教材（特に英語詩）の言語処理様式に着目した議論であり、この言語処理様式が英語の習得過程に有益に寄与するのではないかと主張される。

3. 英語文学（英語詩）の読解が英語の言語形式への気づきを促すという主張の根拠

この主張は、言語形式への気づきに関する第2言語習得研究（言語形式の焦点化、インプット処理理論など）をその理論的基盤とし、文学（特に詩）の読解処理様式がその理論と合致するのではないかと考えられているものである。言語形式への焦点化は、学習者が意味理解をする中で付随的に言語形式への気づきが生じることが第2言語習得には必要であるという考え方である。このことが多くのインテイクを生み、学習者の中間言語体系を発達させるとされている。一方、文学理論の中で、読者は詩を解釈する際に普段よりも多くの注意を言語形式に向けることが以前から指摘されてきている。事実、詩を読む際に、読者の読解時間が長くなる、作品内の言語形式の再生率が高まる、といった実験結果が多く報告されている。

第2言語習得論と文学理論はあまり学問間での交流がなかった。しかしながら、10年ほど前から、第2言語習得論の言語形式への焦点化という考えと、文学理論における文学（特に詩）の読解研究の接点を指摘する研究が見られるようになった。その結果、言語形式の焦点化と英語文学教材の読解の関連性が議論され始め、英語詩の読解活動は言語形式の焦点化を効率的に引き起こすための手段となるかどうか考察されることとなった。

4. 英語詩読解と英語の言語形式への気づきの生起

2000年代初期の研究は、英語詩の読解と言語形式の焦点化の接点を指摘し、英語詩を読解

することで言語形式の気づきが生じるということを実証しようとした。例えば、その先駆的な研究である Hanauer (2001) は、ヘブライ語を母国語とする上級英語学習者 20 名を 2 人組にし、英語詩の意味理解をさせる過程で言語形式への気づきが生じるかどうか、それが意味理解とどのように関係しているのか、を調査した。調査の結果、どのペアからも言語形式への気づきが多く生起し、それが英語詩の局所的理解、全体的理解、さらには意味解釈の修正、と密接に関係しており、英語詩の読解は言語形式への焦点化のタスクとして有効であるということを示した。

2000 年代後半になると、英語詩読解処理の特性を言語形式の焦点化と関係づけることについてコンセンサスが得られ始め、両者の関係を前提としたいくつかの研究がなされた (Badran, 2007; 西原, 2006, 2008)。そして、英語詩の読解作業を通して言語形式への気づきが学習者に生起することが確認されてきた。例えば、西原 (2006) は、テキストが同じ語彙レベルである場合、英語詩の方が英語説明文よりも読解過程で言語形式への気づきが生起しやすい可能性があることを示している。

5. 英語詩読解と中間言語体系の再構築の関連性

しかしながら、学習者が自身の既存の中間言語知識体系に疑いの目を向ける姿も観察されるようになってきた。例えば、西原 (2006) は、中級から上級の日本人英語学習者 30 名に自分の読んでいる箇所をペンでなぞらせながら英語詩を読解させた。その様子をビデオに撮影し、ペンが止まった箇所、著しくスピードが落ちた箇所、その他ペンが不規則な動きをした箇所について、何を考えていたのかをその映像を見ながら事後インタビューした。その中で、既知の言語表現を意識的に捉えていた学習者が観察された。学習者は読解中に辞書を自由に使用してよいことになっていたが、その辞書使用を分析した西原 (2008) では、学習者は、既知語が知らない意味で使われていると判断し、どんな意味があるのかを調べるために辞書を最も使用していたことが明らかとなった。

これまで、これらの現象はもっぱら言語形式への気づきの 1 つのタイプとして考察されてきた。しかし、学習者は、英語詩読解のためには自分の既知語に関する知識に不十分な点があるかもしれないと考えて辞書を引いたと考えられ、中間言語の再構築という観点からもこの現象を考察する必要があると考えられる。一般に英語詩は意味が曖昧であるが、学習者はその曖昧性の解消を既知語に頼り、学習者にとって未知でかつその曖昧性の解消を助ける意味が既知単語にないかどうかを辞書で探していたものと考えられる。ちなみに、Badran (2007) は、英語詩を利用して、学習者の既知の知識を拡張させる指導法を提案している。

このように、英語詩は学習者の中間言語の再構築を促す可能性を秘めていると考えられる。しかし、一方で、いたずらに学習者の知識を攪乱させてしまっている可能性も否定できない。そこで、(1) 英語詩を読解する際に学習者の既知の知識に何が起きているのか、(2) それが知識の再構築にどのように関係するのか (再構築にとって有益なのかどうか)、といった点について考察することが必要となろう。これらのことが明らかになってはじめて、英語詩の英語教育における役割について明確に議論することが可能となろう。ミューズは英語教育に微笑むのか、ただ嘲笑っているだけなのか、今後更に研究が重ねられる必要がある。

引用文献

- 西原貴之 (2006). 『学習者による言語形式への「気づき」の生起に関する研究—文学的読解と説明的読解の比較の観点から—』. 関西学院大学出版会.
- 西原貴之 (2008). 「詩の読解と説明文の読解における辞書使用の違いについての一考察」. 『The 80th General Meeting of The English Literary Society of Japan, 24-25 May 2008』 (pp. 35-37).
- Badran, D. (2007). Stylistics and language teaching: Deviant collocation in literature as a tool for vocabulary expansion. In M. Lambrou & P. Stockwell (Eds.), *Contemporary stylistics* (pp. 180-192). London: Continuum.
- Hanauer, D. I. (2001). The task of poetry reading and second language acquisition. *Applied Linguistics*, 22, 295-323.